

生駒市埋蔵文化財包藏地調査報告書第5集

# 萩原遺跡発掘調査報告書

1986年度

1987・3

生駒市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、生駒市教育委員会が昭和61年度に市立生駒南小学校内の施設を新たに整備することになり、本教育委員会が、荻原町321番地ほかの事前発掘調査をおこなった概要報告書である。
2. 本調査は、昭和61年7月7日に着手し、同年7月19日まで発掘調査を実施し終了した。
3. 発掘調査は、生駒市郷土資料館学芸員・明珍健二を担当者とし、調査員として生駒市教育委員会社会教育課・錦 好見があたった。出土遺物の整理実測などについては明珍健二・錦 好見がおこなった。
4. 本書の執筆は錦 好見がおこなった。
5. 発掘調査の進行、報告書の作成などについて、奈良県教育委員会・楠元哲夫、今尾文昭、奈良県立橿原考古学研究所・泉森 皎、前園実知雄、亀田 博、平群町教育委員会・村社仁史、四条畷市教育委員会・野島 稔諸氏から種々の御教示を受けた。明記して感謝の意を表したい。
6. 発掘調査の進行については、荻原町自治会長・窪 敏一、生駒南小学校長・和田義男諸氏から御協力を受けた。記して厚く御礼申しあげたい。また調査作業については、飛鳥建設株式会社の全面的な協力を得た。

## 本文目次

例　　言	
I はじめに .....	1
1. 調査の契機と経過	
2. 位置と環境	
II 遺跡の概要 .....	2
1. 調査の方法	
2. 基本層序	
3. 出土遺構	
1) 滑状遺構	
2) pit群	
3) 土　　塙	
III 出土遺物 .....	6
IV ま　と　め .....	7

## 図版目次

第1図　　調査地区位置図 .....	9
第2図　　Bトレンチ平面図 .....	11
第3図　　Bトレンチ断面実測図（北壁） .....	11
第4図　　Bトレンチ出土遺物実測図 .....	13
写真1.　生駒市内全域 .....	14
写真2.　Bトレンチ .....	15
写真3.　Aトレンチ・Bトレンチ出土遺物 .....	16
写真4.　Bトレンチ出土遺物 .....	17

## I はじめに

### 1. 調査の契機と経過

生駒市教育委員会は、昭和61年度から市立生駒南小学校施設整備事業として同校敷地内の体育館およびプールの改築工事を実施した。その際、同敷地内が「周知の埋蔵文化財包蔵地」に含まれるなどの理由から事前の発掘調査をおこなうことになった。

今回の調査地区は生駒市萩原町321番地に所在し、昭和58年度改訂の『奈良県遺跡地図』(第1分冊)に「周知の埋蔵文化財包蔵地」(弥生時代・遺物出土地)として収録されており、以前に弥生中期から後期(畿内第Ⅲ様式から第V様式)の土器、およびサヌカイト製石器などが出土したといわれている地点である。

そこで今回の調査は、これらの情報をもとに弥生時代の遺構の有無および範囲の確認を目的としておこなった。調査面積は約200m<sup>2</sup>で、2本のトレンチを設定して掘り下げを実施した。調査期間は、昭和61年7月7日から同年7月19日までの計12日間である。

### 2. 位置と環境

本調査区は、生駒市萩原町321番地に所在し、生駒山東麓から生駒谷にむかってのびる丘陵に位置している。付近には竜田川によって形成されたなだらかな段丘が西接し、また南側には竜田川支流の神田川が西から東に流れている。

本遺跡周辺には、北へ約200mの地点に『大和国条里復原図』にみえる菜畑城址(『奈良県遺跡地図』4-D・生駒23)が位置し、その北の青山台には奈良時代の官僚で大宝元年(701)遣唐使として入唐し、また從五位下にまで叙せられ宮内省主殿寮の役人をつとめ、神亀5年(728)に没したことが、その墓誌より明らかな美努連岡萬基がある。同墓は昭和60年に発掘調査され、明治5年に当初の墓誌が発見された後、同11年埋納された模造墓誌および火葬されたことが確実にわかる成人骨が確認されている。また、その北方には律宗文殊山竹林寺があり、境内には天平21年(749)2月に首原寺で没し竹林寺に埋葬されたという記載のある行基墓(国指定史跡)、また現在知られているうちでは生駒市内唯一の前方後円墳である竹林寺古墳(『奈良県遺跡地図』第1分冊・4-D・生駒15)がある。竹林寺古墳は、生駒山東麓の尾根上に築かれ前方部を削平されているが全長約80mと推定される。後円部径約45m、高さ約8mの古墳である。昭和16年におこなわれた埋葬施設の調査では粘土被上に板石を並べその上に割石を積んでいたことが確認されている。出土遺物としては内行花文鏡、石鏡、鉄劍片、鉄釘などが挙げられ、また墳丘の各部分で円筒埴輪が発見されている。境内にはこのほかにも昭和61年に発掘調査によって確認された、鎌倉時代の僧で嘉元元年(1303)に没した忍性墓がある。調査によって墓塔の下から銅製骨蔵器が検出され、また周

辺からは追葬施設、火葬場跡および後世の埋葬施設などが確認されている。竹林寺の南側に臨む尾根上にある往生院境内には鎌倉時代の共同墓地である奥山墓地(『奈良県遺跡地図』第1分冊、4-D・生駒16に登録の「周知の埋蔵文化財包蔵地」)がある。奥山墓地は行基の遺体を彼の遺言により火葬した地であり、以後有里ほか9カ大字の郷墓となった。数多くの石造文化財が残っており、なかでも重要文化財に指定されている正元元年(1259)銘の宝篋印塔は県内でも最古の紀年銘をもつ貴重な資料である。このほか、北西には重要文化財に指定され応安4年(1371)に建立された本堂および永仁元年(1293)の宝篋印塔を擁する円福寺などがある。また南部の小平尾町には、鎌倉時代の建立とみられる重要な文化財の本堂を有する宝幢寺もある。

以上のように本遺跡は、かつて弥生時代の土器が出土したといわれていることに加え、生駒市内でも特に史跡および文化財などが密集した地点にあり、遺跡の概要を考える上で重要な位置にあるといえる。

## II 遺跡の概要

### 1. 調査の方法

本調査は、生駒南小学校敷地内に面積が合わせて約200m<sup>2</sup>のA、B二つのトレンチを設定したうえで、基本層序を確認しながら遺構の検出につとめた。トレンチは改築前の体育館をはさんで北側をAトレンチ、南側をBトレンチと称して設定し、重機および人力による掘り下げをおこなった。

### 2. 基本層序

#### 1) Aトレンチ

地表下約1mまで淡黄褐色土の盛土がつづき、その直下は灰褐色粘土の地山に至る。遺物包含層は確認されなかった。

#### 2) Bトレンチ

Bトレンチの北面で層序の確認をおこなった。第1・2層までは盛土である。第1層は、厚さ約20cmの淡黄褐色土で第2層は厚さ約20cmの暗茶褐色土から成る。その下の第3層は地表下約32cmの所にあり、厚さ約15cmをはかる淡黒褐色砂質土の遺物包含層である。これにつづく第4層および第5層はいずれも遺構面である。第4層は地表下約40cmのところにあり、最大厚が約10cmの明黄灰褐色砂質土である。第4層からはSD-08を検出した。SD-08はトレンチ西寄りに約1mの長さで遺存しており、明青灰褐色砂質土が入っている。第5層は地表下約40~50cmのところに位置し、最大厚約20cmをはかる淡黄灰褐色砂質土である。第5層ではトレンチ中央を南北に走るSD-01を検出できた。SD-01

は内部に淡黄灰褐色砂質土が入り、次の第6層にも掘りこまれていることが断面から確認できる。遺構面下の第6層は地表下約50~60cmの地点にあり、最大厚約35cmをはかる黄褐色粘質砂質土である。その下の第7層は黄褐色粘土の地山である。

### 3. 出土遺構

遺構は、Bトレンチからのみ出土し、Aトレンチでは確認できなかった。T.P.122,369mをはかるBトレンチでは、サブトレンチを設定し部分的な掘り下げをおこなった。その結果、遺物を包含する第3層を確認、次に第4、5層では遺構面を確認した。

検出した遺構は、溝状遺構15条、Pit群および土塙1基で年代はいずれも出土遺物から中世末~近世にかけてのものと思われる。

#### 1) 溝状遺構

##### SD-01

トレンチ内を南北に走り、出土遺構中最も大きな溝で第5層で確認した。現存長約14m、最大幅約60cmをはかる。トレンチ西側の未掘区にもつづく可能性が高いと思われる。並行して走るSD-02を切り、またトレンチ北西で直行するSD-09を切る。北東側ではSD-06、SD-07と接続しているが、前後関係は不明である。しかし、遺物をみると年代の隔たりはないと考えられる。

出土遺物は、土師器に類似した素焼き土器片、瓦器破片および羽釜片などである。

##### SD-02

第5層で確認した。SD-01と並行して走る南北に通じる溝で現存長約16m、最大幅約50cmである。SD-01に切られ、中央部で直行するSD-15、および南側で同じように直行するSD-04を切る。トレンチ南側部分は後世の攪乱を受けており不明である。また、中央部では柱穴と思われるものを含めたPit群の真中を通り、これを切っている。

出土遺物は、瓦器椀に類似した中世の黒色土器片1点と素焼き土器片および瓦器小片が数点みられる。

##### SD-03

第4層で確認した。SD-01、SD-02と並行してトレンチ内を南北に走る。現存長約13m、最大幅約50cmをはかる。中央部で直行するSD-15を切り、南側ではSD-04に切られた後、幅を狭めてSD-05につづく。前後関係についていえば、SD-02より古いSD-04およびPit群に切られていることから、SD-03は前三者よりも古く、SD-15よりも新しいと思われる。

出土遺物は、瓦器片、素焼き土器小片および羽釜片1点がみられる。

#### **SD-04**

第5層で確認した。トレンチ南側を東西に走っている細い溝でトレンチ西側の未掘区につづくと思われる。現存長約3.6m、最大幅約16cmをはかる。SD-02に切られ、SD-03およびSD-10を切る。遺物は検出されなかった。

#### **SD-05**

トレンチ南端にかかるて検出された東西に走る溝で第5層で確認した。現存長約2m、最大幅約16cmである。SD-03を切り、未掘区につづくと思われる。

出土遺物としては、瓦器片、素焼き土器小片があげられる。

#### **SD-06**

第5層で確認した。トレンチ北側でSD-07に臨接して発見された東にのびる溝で、現存長約2m、最大幅約40cmをはかる。サブトレンチ設定部分にもつづく可能性があり、またSD-01付近では後世の擾乱をうけた痕跡がPitとして残っている。なおSD-01との前後関係は不明である。

出土遺物は、瓦器底部片および素焼き土器破片などがみられる。

#### **SD-07**

SD-06の北側に臨接し、同様にSD-01から東側にのびる溝である。第5層で確認した。現存長約2m、最大幅約25cmをはかる。SD-06およびSD-01との前後関係は不明である。素焼き土器小片が出土している。

#### **SD-08**

トレンチ西側をSD-01に並行して走る溝で第4層で確認した。現存長約7.2m、最大幅約20cmである。SD-09に直行しているが、前後関係は不明である。SK-01およびPit-02に切られる。また後世の擾乱穴も検出した。遺物の出土はみられなかった。

#### **SD-09**

SD-08と直行する東西方向に走る溝で、SD-08と同じく第4層で確認した。現存長約1.8mをはかり、最大幅は約50cmである。SD-01に切られ、未掘区にもつづくと思われる。SD-08との前後関係は不明だが、時期は近いものと思われる。

出土遺物としては、素焼き土器底部片および瓦器小片が数点みられる。

#### **SD-10**

トレンチ南側でSD-04およびSD-05に切られる形で検出した。現存長約1m、最大幅約15cmの細い溝である。出土遺物はみられなかった。

#### **SD-11**

第5層で確認した。トレンチ北側を東西に走る溝で現存長約1.9m、最大幅約20cmをは

かる。西側はSD-01付近で先端を細くすばめておわり、東側は未掘区につづく。

瓦器碗小片が出土しており、SD-01出土のものと同時期であると思われる。

#### SD-12

トレンチ北側を東西に走る。第5層で確認した。SD-11と臨接し、規模もほとんどSD-11と変わらない。現存長約1.6m、最大幅約10cmである。SD-11と同じく西側は先端をすばめておわり、東側は未掘区につづく。出土遺物は確認できなかった。

#### SD-13

SD-11、SD-12と臨接し、トレンチ北壁にかかるて確認された東西に弯曲しながら走る溝である。現存長約1.4m、最大幅約15cmをはかり、未掘区につづいている。素焼き土器小片が1点出土している。

#### SD-14

第5層で確認した。SD-06の南側に接する溝で南に弯曲して走り、内部には後世の攪乱がみられる。現存長約3m、最大幅約16cmをはかる。素焼き土器破片が出土している。

#### SD-15

SD-01、SD-02、およびSD-03に直行し、三者に切られている、トレンチ中央部を東西に走る溝である。現存長約3.6m、最大幅約16cmである。出土遺物は確認できなかった。

#### Pit群(Pit-03~Pit-19)

Pit群は、おおよそ二群に大別できる。一方は、トレンチ中央やや南寄りでSD-02に切られ、SD-03を切っている一群である。他方は、SD-14の南側からSD-15の間に広がるものである。

総じて径約30cm、深さ約20~30cm程度のものが多く、なかには柱穴と思われるものもある。Pit-06からは柱痕も検出できたことから、何らかの建物跡が想定できるが、柱の対応関係は不明である。時期は出土遺物から溝状遺構と同時期であろう。

Pit-09からは素焼き土器の小片、Pit-12からは素焼きの皿が、またPit-16およびPit-13からは瓦器碗に類似した近世の黒色土器破片が出土している。このほかにもPit-16からは用途不明の須恵器底部、およびPit-17から素焼きの皿が出土している。

#### 土塹(SK-01)

トレンチ北寄りに位置し、第5層で確認した。SD-01およびSD-08の中間において両者を切る形で検出された。上部径約130×100cm・下部径約40×30cmの隋円形Pit

である。当初、石が整列して並べられている状況だったので石組遺構を想定したが、上面の石をとり去るとその下部にも石が確認できた。つづいて掘り下げていく過程で、内部から30個余りの人頭大から拳大ほどの石が無造作に投げ込まれた状態で検出でき、土塹であることを確認した。しかし、このような数多くの石がいかなる目的で投げ込まれたかは不明である。時期は、本調査地区中最も新しいといえるが、出土遺物からみて他の遺構とそう隔たりはない。

S K - 0 1 はまた、本調査地区中最も多くの遺物が出土した遺構である。なかでも完形に近い素焼きの皿4個体分と黒色土器破片が、石にはさまれた形で検出された。ほかにも素焼き土器破片、瓦器破片および羽釜片などが出土している。

### III 出土遺物

出土遺物はすべて土器である。土器は大部分が溝および土塙中から出土しており、およそ遺物箱一杯分を数える。土師器に類似した素焼き土器あるいは瓦器が大半で、ほかに瓦器に類似した黒色土器、須恵器および羽釜片などがみられる。

1) S D - 0 1 出土。須恵器の碗と思われる口縁部破片である。胎土は灰白色を呈し、砂粒を多く含み、器面には凹凸がみられる。

焼成良好。復原口径約15.0cm・器高約2.6cm・最大厚約3mm。体部からゆるやかに外傾しながらたちあがった後、わずかに内彎しながら口縁端部で直立する。口縁端部はまるく、内面上部には沈線を施す。

2) S D - 1 4 出土。瓦器碗体部片である。復原口径約9.9cm・残存高約3.65cm・最大厚約3.5mm。焼成は良好で器面にはやや歪みがみえる。体部はゆるやかに外傾しながらたちあがり、口縁部で内彎した後、口縁端部で外反する。口縁端部はまるく内面がふくらんでおり、沈線が入る。

3) S D - 0 5 出土。黒色土器口縁部破片である。焼成良好。器面には砂粒が混じり、わずかに凹凸がみられる。復原口径約21.4cm・残存高約3.6cm・最大厚約2mm。体部から外傾しながらたちあがり、口縁端部で直立する。口縁端部はまるく、内面上部に沈線を施す。

4) P i t - 1 7 出土。素焼きの手捏ねの皿である。焼成良好。胎土は淡褐色を呈し、器面外面は凹凸がみられ砂粒を多く含み、指圧痕を残す。口縁部に段をもつ。口径約9.8cm・器高約1.8cm・最大厚約5mm。

5) P i t - 1 3 出土。手捏ねの素焼きの皿である。口径約16.0cm・器高約3.8cm・最大厚約4mmをはかる。焼成良好。胎土は茶褐色を呈し、砂粒が混じる。器高は凹凸に富み、指圧痕を残す。口縁端部はやや外反して折れ曲がる。口縁部には段をもつ。

- 6) SD-02出土。瓦器碗に類似した黒色土器の口縁部破片である。復原口径15.0cm・残存高約5.2cm・最大厚約4mmと相対的に厚手の土器で比較的がっしりとした重量感がある。体部から直立気味に外傾しながらちあがり、次いでやや内彎した後口縁端部で著しく外反する。口縁端部は丸味を帯び、調整は丁寧に施されている。
- 7) 第4層出土。瓦器碗底部小片である。内径約3.6cm・残存高約1.3cm・最大厚約3.5mm。器面には凹凸がみられる。焼成良好。高台はハリツケしており、比較的高く、断面は逆三角形を呈する。
- 8) SD-06出土。瓦器碗底部破片である。焼成良好。内径約3.5cm・残存高約1.0cm・最大厚約2mm。高台はハリツケている。
- 9) SD-02出土。瓦器碗底部小片である。内径約2.85cm・残存高約1.5cm・最大厚約4mm。焼成良好。高台はハリツケで内径のわりに大きく、端部は鈍く逆三角形を示す。体部外面に不定方向のナデがみられる。
- 10) 第4層出土。瓦器碗底部小片である。内径約5.1cm・残存高約1.2cm・最大厚約1.5mm。高台はハリツケで折れ曲がる。
- 11) Pit-16出土。黒色の土器である。焼成良好。復原口径約19.8cm・残存高約1.7cm・最大厚約3mmをはかる比較的浅めの皿である。体部から口縁部までゆるやかに外傾しながらちあがる。内面にはナデがみられる。
- 12) SK-01出土。素焼きの手捏ね土器で小型の皿である。胎土は淡灰褐色を呈し、大きめの砂粒が混じる。焼成良好。口径約9.8cm・器高約1.8cm・最大厚約3mmをはかる。口縁部は内外面に段をつくり、ゆるやかに外反しながら口縁端部で外方に折れ曲がる。
- 13) SK-01出土。素焼きの手捏ね土器ではほぼ完形に近い小型の皿である。口径約10.2cm・器高約2.6cm・最大厚約7mmをはかる。淡灰褐色を呈し胎土に砂粒を含む。焼成良好。器面には指圧痕が残る。比較的厚手で口縁端部に沈線を施す。部分的にススが付着する。
- 14) SK-01出土。素焼きの皿で脚部がつく。焼成は良好で、胎土は淡褐色を呈し砂粒を少々含む。口径約17.2cm・器高約4.2cm・最大厚約6.5mm。体部はゆるやかに外傾しながらちあがり、口縁端部で屈曲して外方に広がる。高台はぶ厚く背が高く、外側にハリツケられている。

#### IV まとめ

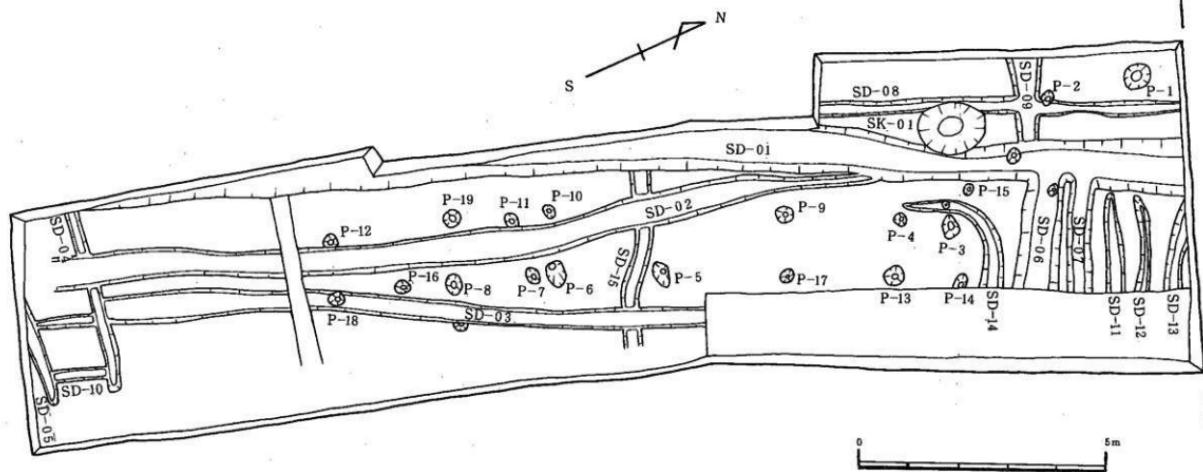
今回の調査で検出された遺構は、山土遺物から中世末期から近世にいたると思われる溝状遺構15条、Pit群、土塙1基のみである。これらの遺構面の直下は地山であり、当初予想されていた弥生時代の遺構を確認するには至っていない。

従って、前述にもあるとおり今回の調査の目的である「周知の埋蔵文化財包蔵地」における遺跡の有無および範囲の確認という点では、中世末期から近世にかけての遺跡の存在を確認したのにとどまり、弥生時代の遺跡の有無は現状では明らかではない。また、調査に関連して実施した調査地付近の踏査でも中・近世の土器片を発見している。以上のことから、本遺跡を単に弥生時代の遺物散布地として把握するのみでなく、中・近世の遺構をも含有しているという事実に即して本遺跡の性格を再度検討する必要があるのではないかと思われる。



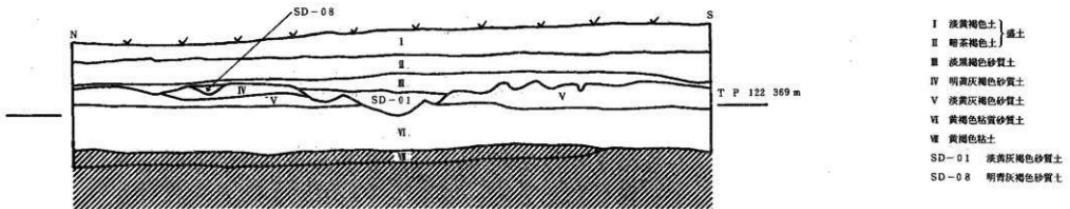
第1図 調査地区位置図



図  
2

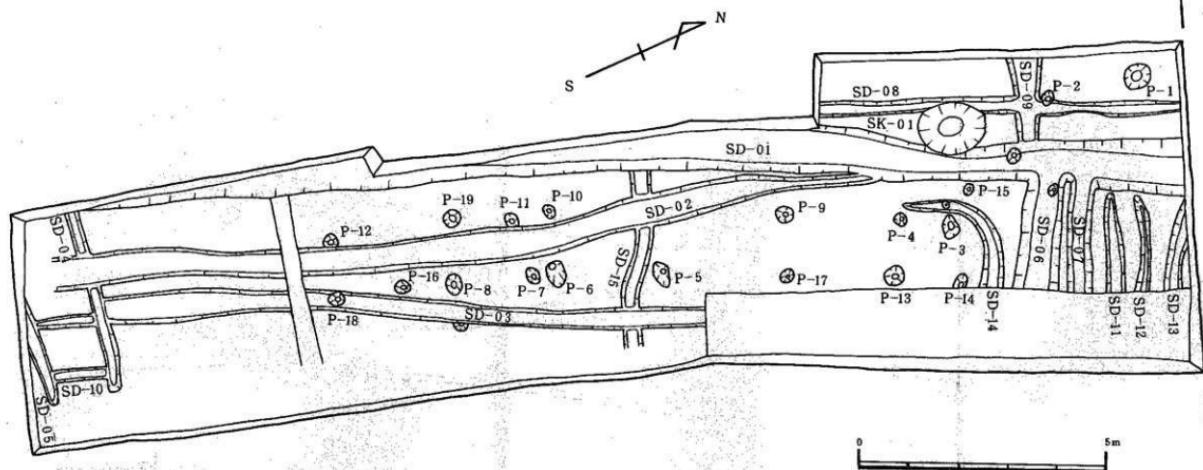
第2図

Bトレントレンチ平面図

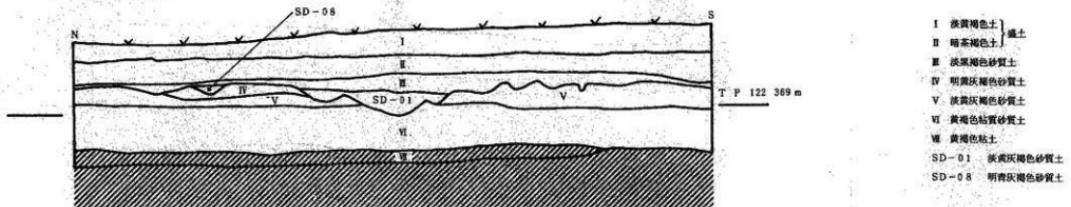


第3図

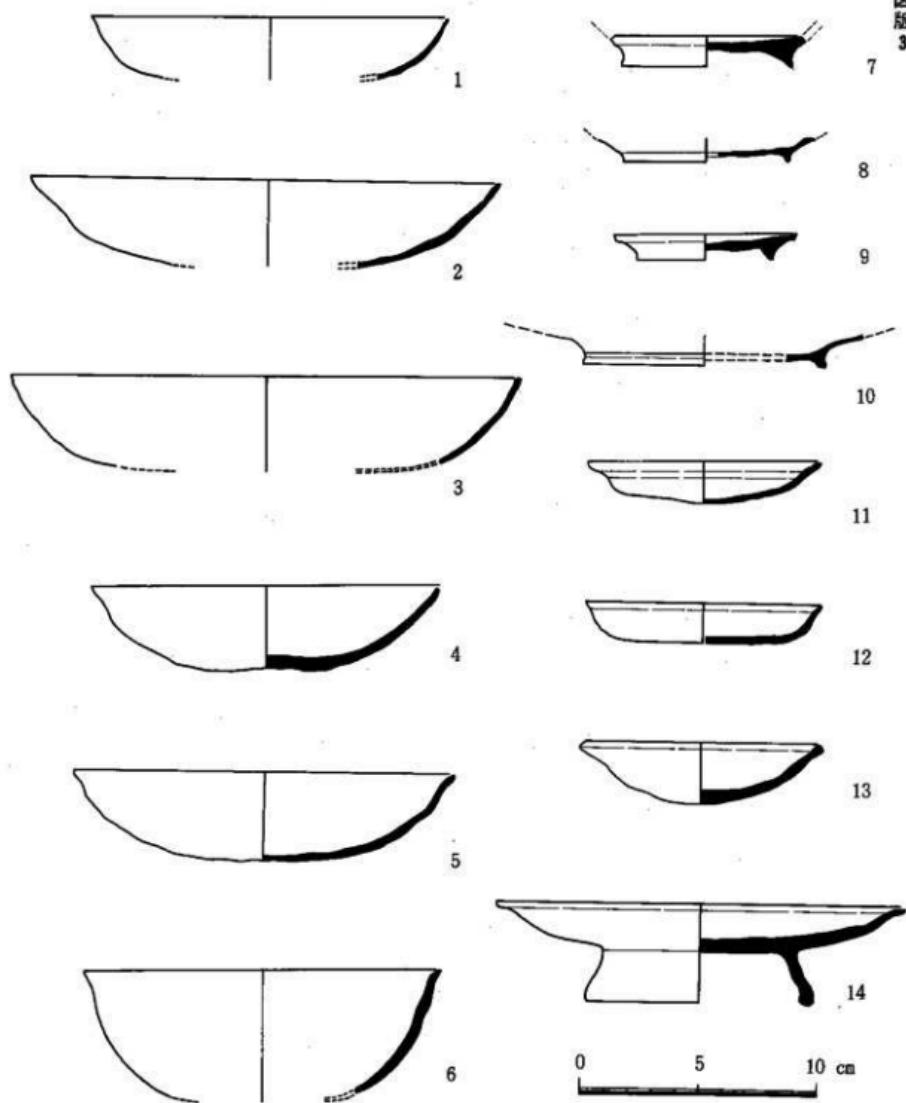
Bトレントレンチ断面実測図(北壁)



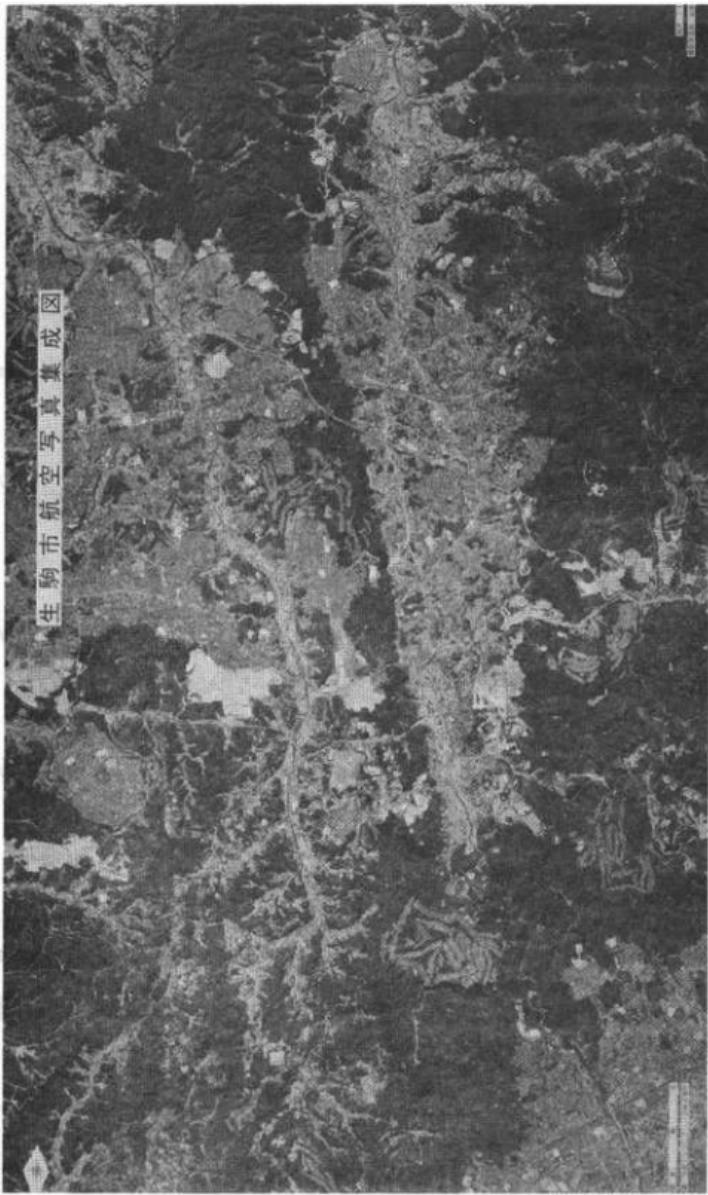
第2図 Bトレーニング平面図



第3図 Bトレーニング断面実測図（北壁）



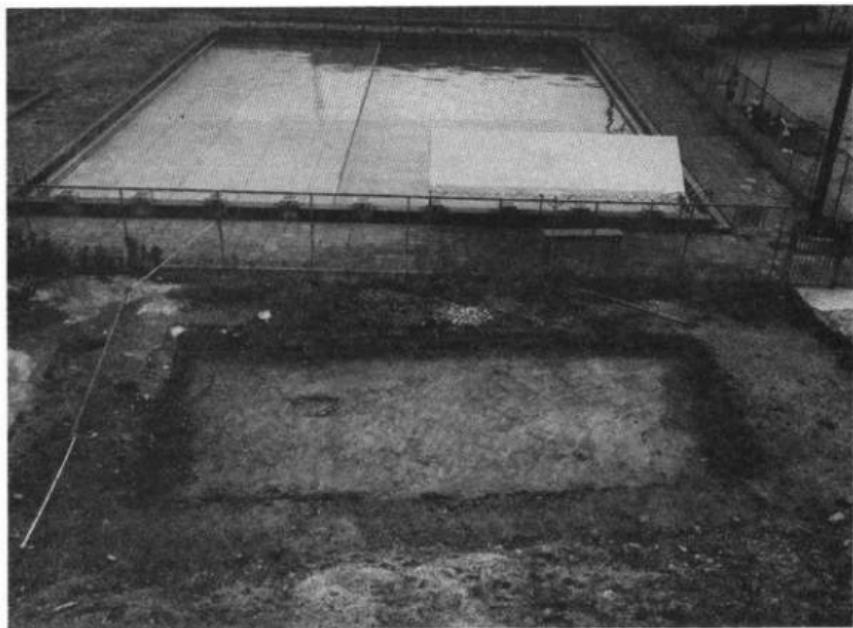
第4図 Bトレンチ出土遺物実測図



生駒市航空写真集成図

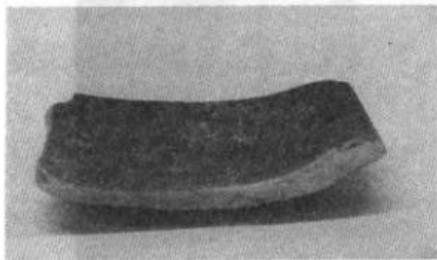


B トレンチ

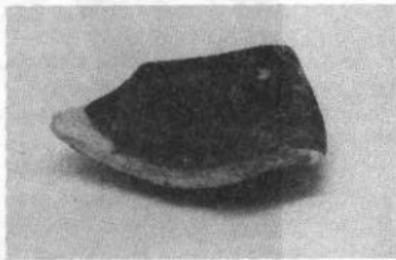


B レンチ出土遺物 ▽

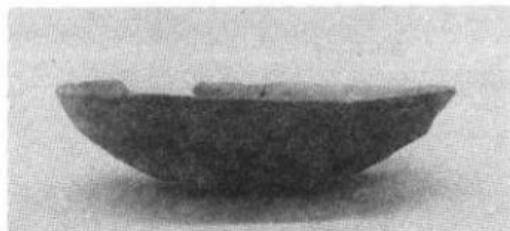
△ A レンチ



2

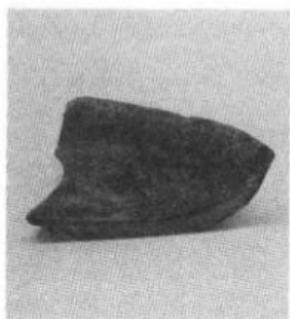


6

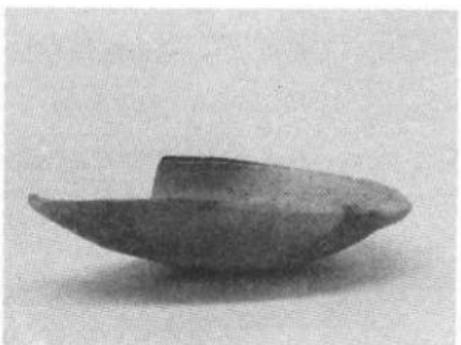


- 16 -

4



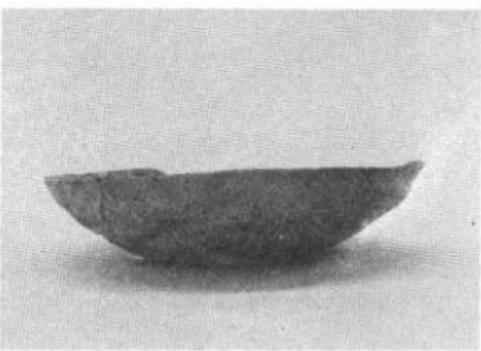
12



13



7



5



10



14  
B トレンチ出土遺物

生駒市埋蔵文化財包藏地調査報告書

昭和 61 年度

印 刷 昭和 62 年 3 月 25 日

発 行 昭和 62 年 3 月 31 日

編 集 生駒市教育委員会  
発 行 生駒市東新町 8 番 38 号

印 刷 株式会社 昭文社  
奈良市柏木町 176-1